

1. 略歴

- 1994年4月 東京大学教養学部文科三類入学
- 1996年4月 東京大学文学部言語文化学科日本語日本文学（国文学）専修課程進学
- 1998年3月 同 卒業
- 1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野修士課程入学
- 2001年3月 同 修了
- 2001年4月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程入学
- 2006年3月 同 単位取得退学
- 2009年4月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程再入学
- 2010年3月 同 退学 2010年7月 博士（文学）学位取得（東京大学）
- 2011年4月 ノートルダム清心女子大学文学部 専任講師
- 2014年4月 ノートルダム清心女子大学文学部 准教授
- 2019年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本中世文学・和歌文学

b 研究課題

日本の中世文学・和歌文学の研究を専攻している。特に平安時代後期から中世にかけての言説を研究の中心とし、鴨長明の諸作品（『方丈記』『無名抄』『発心集』）と和歌・歌学書・歌論書を主たる分析対象とする。核となる問題意識は、言葉がどのような世界をつくりだすのか、何を表現するのかということにある。その現場を、表現が巧まれる必然性・言説の主体や文化圏の価値観や構想という視点から分析し、特に中世前期における人と言葉の有り様の解明を試みる。言葉によって世界が構築される事例として、新古今時代を描出する『源家長日記』の分析を進めている。また、中世における紀行文学隆盛の基底として、巡礼記や和歌を伴う旅の記・物語といった作品群に着目し、旅・移動をめぐる言葉の動態を表現史・文学史として把握することを目指している。

c 概要と自己評価

鴨長明の諸作品を軸とした研究については、単著『鴨長明研究——表現の基層へ』（2015）にまとめたが、その過程で醸成した新たな問題意識をもとに、引き続き、『方丈記』や『発心集』についての論考を発表した。特に、『方丈記』については、災害を捉える視線・枠組みの分析を通して、古典として現代まで読み継がれる必然性の解明を試みている。また、中世和歌史の最重要歌人と位置付けられる西行について、その伝説化に大きな役割を果たした『西行物語』の分析をすすめ、個人という存在が公共的価値を有する古典文学作品となるプロセスを考察した。読解と表現分析を通して作品が古典となる文学史的必然性を解明し、現代における古典文学の意義を再考することを、今後の課題にしたいと考えている。

d 主要業績

(1) 論文

木下華子、「『西行物語』構想の方法——名所歌との関連をめぐって——」、『国語と国文学』、95-11、92-106 頁、2018.11

木下華子、「『発心集』蓮華城入水説話をめぐって」、倉本一宏編『説話研究を拓く 説話文学と歴史資料の間に』、389-410 頁、2019.2

木下華子、「災害を記すこと——『方丈記』「元暦の大地震」について」、『日本文学研究ジャーナル』、13、55-68 頁、2020.3

(2) 啓蒙

木下華子、「遁世者と乱世」、「軍記物語講座によせて」、8、（花鳥社HP）、web 原稿、2020.2

木下華子、「数寄者と中世文学」、『文化交流研究』、33、11-19 頁、2020.3

(3) 研究発表

木下華子、「『西行物語』構想の方法——名所歌との関連をめぐって」、東京大学中世文学研究会、2018.7

木下華子、『方丈記』の時間——「朧化」をめぐって——、2018年度輔仁大学日本語文学科創立50周年—台湾日本語文学会創立30周年記念国際シンポジウム台湾における日本研究の課題と展望—文学・言語・社会、2018.12

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

ノートルダム清心女子大学非常勤講師、2019.4～2019.9

講演、早島町立図書館古典文学講座（於、岡山県早島町）、「能「藤戸」を読む」、2018.8

講座、NHK文化センター高松教室（於、香川県高松市）、「中世日本の随筆を読む」、2018年度

(2) 学会

中世文学会常任委員、2019年度

西行学会会計監査委員、2018・2019年度